12 世紀ホラーサーンにおけるウラマーの地域社会像
―「よそ者」観の検討を中心に―

西　村　淳　一
九州大学文学部　非常勤講師
（現　早稲田大学イスラーム地域研究機構　主任研究員）

緒　　言

西暦 7 ～ 12 世紀のイラン北東部、ホラーサーン地方におけるウラマー（‘ulamā’　単数形は ‘ālim 「学者」）の活動に関しては、ブレット（Bulliet, R.W.）の著作を代表として多くの先行研究がニーシャープールの事例を検討している一方、同都市と並んでホラーサーンの中心都市であったメルヴの事例については、地方史文献『メルヴ史』が散逸してしまっていることもあり、これまで十分に検討されてこなかった。しかし同地出身のアーリム、サムアーニー（al-Sam‘ānī　1166 年没）のアラビア語著作を活用することによって新たな研究が可能であることは、拙稿においてたびたび指摘しているところである。彼の現存著作を徹底的に活用することが、メルヴおよびホラーサーンのウラマー研究を進展させる 1 つの鍵なのである。

ところで、サムアーニーの著作を見ていると、ガリーブ（gharīb　複数形は ghurabā’）という単語に遭遇することが間々ある。このアラビア語単語には主に形容詞として①「奇妙な」、②「よそ（余所）の」という 2 つの意味があり、サムアーニー著作中の事例においては後者の意味が名詞に転じて「よそ者」を示していると考えられる。では、この場合の《よそ者》とは、一体どのような人々だったのだろうか。ガリーブという単語については、ローゼンタール（Rosenthal, F.）が検討を行っているものの概観の域を出ておらず、また他に先行する研究はほとんど存在しない。このような単語の用例を検討することは、小さくは 12 世紀のホラーサーンにおけるウラマーの社会構造を解明すること、大きくは現代に至るまでのイスラーム教徒全般の他者認識を理解することの一助となるであろう。

以上のような観点から、本研究では、サムアーニーの著作の 1 つであり彼の学問の師 1446 名を対象とした人名録である『シャイフ列伝からの抜き書き』（以下『シャイフ列伝』と略記）を一次史料として単語ガリーブの用例を調査・検討した。なお比較材料として地方史文献『ニーシャープール史』正続編についても同様の調査を行った。

分　　析

1．『シャイフ列伝』中の単語ガリーブの用例

『シャイフ列伝』中、この単語は 33 か所に登場する。そのうち 3 例を別添「参考資料」に訳出･引用したので、以下ではそちらを参照しながら話を進めていく。

まずは【引用 1 】を見てみよう。注目すべきは最後の部分に「地元の人々やよそ者たち」という表現が見られることである。ここで「地元の人々」と訳しているのはアフル・アルバラドである。バラドという単語は、基本的には「町」という意味を持つが、『シャイフ列伝』ではワタン（waṭan）という単語と似通った使われ方をしていることもあり、ここでは「地元」と訳した。このように、この文章ではアフル・アルバラドとガリーブの複数形グラバーとが対置されていることから、ガリーブが「よそ者」という意味で用いられていることは明らかである。

なお、この文章の場合の地元とは、文脈から考えて都市メルヴないしはメルヴ都市圏を指し示しているので、よそ者のほうもまた《メルヴへやって来た外来者》を指し示していることになる。しかし、『シャイフ列伝』中のガリーブが全て《メルヴへやって来た外来者》を指し示しているのかというと、そうではない。ここで【引用 2 】を見てみよう。この文章ではアフル・アルバラドの代わりにバラディーユーン、つまりバラドのニスバ、バラディーの複数形が用いられているが、アフル・アルバラド同様「地元の人々」と訳した。このバラディーユーンがグラバーと対置されている点は【引用 1 】と同様であり、この文章でもガリーブがよそ者の意味で用いられていることは明らかである。ただし、この文章の場合の地元とは、文脈から考えて都市ナウカーンを指し示して

いると推測されるので、よそ者のほうもまた《ナウカーンへやって来た外来者》を指し示していることになる。このように、『シャイフ列伝』中のガリーブは、《メルヴに限らない、ある特定の地域社会に一時滞在した外来者》を指し示すために用いられているのである。

ちなみに上に引用した２例を含め、アフル・アルバラドないしバラディーユーンとグラバーとが対置される用例は『シャイフ列伝』中に５例確認される。この５例以外で、ガリーブがよそ者を意味することをはっきり読み取れる事例としては【引用３】のようなものがある。この文章においては、ハマザーニーユーン、すなわちハマダーンの人々とグラバーとを明確に区別しており、この場合のガリーブが《ハマザーニーでないよそ者》を指し示すことは明らかである。ここで見られるミン・アルグラバー（「よそ者に含まれる」）という表現は『シャイフ列伝』中に４か所確認される。

２.『ニーシャープール史』正続編中の単語ガリーブの用例

『ニーシャープール史』（ペルシア語文献）においては３回、『ニーシャープール史補追』（アラビア語文献）においては13回、『（ニーシャープール史）補追からの抜粋』（アラビア語文献）においては23回この単語が登場する。それらのうち７例を別添「参考資料」に訳出・引用した。紙面の都合もあり、それらの内容を詳細に検討することは差し控えるが、【引用４】【引用５】【引用６】、特にメッカに滞在したホラーサーン出身者をガリーブと呼ぶ【引用４】とニーシャープール出身者でない者をガリーブと呼ぶ【引用６】からは、『ニーシャープール史』における単語ガリーブもまた《ある特定地域に滞在した外来者》を指し示しているものと考えられる。ちなみにこの３つの用例は、ペルシア語文献中における用例であるという点でも興味深いものであり、また【引用５】に見られるように７世紀のアラブ征服時における征服者側のアラブ・ムスリムたちをガリーブと表現している点でも極めて興味深いものである。続いて【引用７】【引用10】では、ガリーブの複数形グラバーがバラディーユーンないしアフル・アルバラド、すなわち「地元の人々」と対置されており、サムアーニーの『シャイフ列伝』中に見られた用法が２つの『ニーシャープール史』続編でも見うけられることが、これらからわかる。なお【引用８】および【引用９】もそれに準じる用例である。このように、『ニーシャープール史』正続編に登場する単語ガリーブもまた『シャイフ列伝』同様に用いられており、このような用法が少なくとも12世紀前後のホラーサーンのウラマーの間で一般的なものであっただろうということが推測されるのである。

結　　論

サムアーニーの人名録『シャイフ列伝』中にみえる単語ガリーブの用例、特に「地元の人々」という表現と対に用いられる例からは、彼が抱いていた考え方、すなわちアーリム各人がある特定の（都市を中心とした）地域社会に帰属しているとみなす考え方が窺われ、またそれと表裏一体をなすように《ある特定の地域社会に一時滞在した外来者》すなわち《よそ者》を区別しようとする意識も存在していたことを読み取れる。そして地方史文献『ニーシャープール史』正続編においても同単語が『シャイフ列伝』と同様に用いられていることから、サムアーニーを含め12世紀前後のメルヴやホラーサーンのウラマーの間に《よそ者》を区別しようとする意識が共有されていたことが推測される。一般にイスラーム社会は人間の移動がきわめて活発に行われた社会として知られ、特にウラマーは長距離、長期間に渡る遊学を行ったことで知られているが、このような流動性の高い環境の中においてさえ、地元を重んじる意識やよそ者を区別する意識が働いていることは留意されてしかるべきである。

このような地元を重んじる意識は、いわゆる《お国自慢》につながる意識でもあろう。《お国自慢》の伝統がイスラーム社会に広く存在し重んじられていたことは、地方史文献のサブ・ジャンルであるファダーイルもの、つまり『ファダーイル・何処何処（何処何処の美徳）』という書名を持った地方史文献が少なからず書き残された事実を通して、よく知られている。そのような伝統が形成されるための１つの前提条件として、地元を重んじる意識やそれと表裏一体をなすよそ者を区別する意識がウラマーの間に働いていたことを見逃してはならない。以上で検討した単語ガリーブの用例は、まさにそのような地元志向のささやかな発露なのである。

今後の課題

サムアーニーは50点以上にのぼる著作を残したことで知られているが、ブロッケルマン（Brockelmann, C.）やゼルハイム（Sellheim, R.）の見解を総合すると、そのうち少なくとも７点の現存が確認されている。その中で最も著名かつ大部な作品が『ナサブの書』という人名辞典であり、今回の研究では利用できなかったもの

の、いずれ同書に対しても今回と同様の調査を行う必要がある。なお同書に関しては、これまでに 3 種類の校訂本が出版されているがいずれの版も利用上の諸問題をかかえており、究極的には写本レヴェルでの調査が求められる。今回の研究奨励金を利用して、トルコ、イギリス、オランダに所蔵されている同書写本 14 点のデジタルデータを入手できたことをここに付記しておく。

註

なお上記内容については、2010 年度九州史学会イスラム文明学部会 ―2010 年 12 月 12 日九州大学にて開催― においてより詳細な報告を行った。

謝　辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金を賜りましたことを深く感謝申し上げます。

文　献

一次史料

1) Muntakhab: al-Sam‘ānī, *al-Muntakhab min Mu‘jam Shuyūkh* (Muwaffaq b. ‘Abd Allāh b. ‘Abd al-Qādir, ed.), 4 vols., al-Riyāḍ, 1996.

2) T.Naysābūr: al-Ḥākim al-Naysābūrī, *Ta’rīkh-i Nīshābūr* (Moḥammad Reżā Shafī‘ī Kadkanī, ed.), Tehrān, 1375Kh..

3) Muntakhab(T.N.): al-Ṣarīfīnī, *al-Muntakhab min al-Siyāq* (Moḥammad Kāẓem al-Maḥmūdī, ed.), Qom, 1362Kh..

4) Siyāq(T.N.): al-Fārisī, *al-Mukhtaṣar min Kitāb al-Siyāq li-Ta’rīkh Naysābūr* (Moḥammad Kāẓem al-Maḥmūdī, ed.), Tehrān, 1384Kh..

5) T.Naysābūr(MSS.): *The Histories of Nishapur* (R.N. Frye, ed.), Cambridge, 1965.

二次資料

1) R.W. Bulliet: *The Patricians of Nishapur*, Cambridge, 1972.

2) F. Rosenthal: The Stranger in Medieval Islam, *Arabica* **44**, 35-75, 1997.

3) C. Brockelmann: *Geschichte der Arabischen Litteratur*, **S-1**, 564-565, Leiden, 1937.

4) R. Sellheim: AL-SAM‘ĀNĪ, *The Encyclopaedia of Islam* (2nd ed.), **8**, 1024-1025, Leiden, 1995.

参考資料

『シャイフ列伝からの抜き書き』および『ニーシャープール史』正続編における アラビア語単語ガリーブの用例

Ⅰ.『シャイフ列伝からの抜き書き』の場合

【引用１】［Muntakhab 3: 1559-1560］
「Abū Manṣūr Muḥammad b. ‘Alī b. Maḥmūd b. ‘Abd Allāh al-Tājir al-Zūlahī。 ～中略～ メルヴの村々の１つであるズーラーフ（Zūlāh）村の出身。 ～中略～ 我が師でもあるAbū al-Fatḥ Muḥammad b. ‘Abd al-Raḥmān al-Khaṭīb al-Ṣūfī が彼（アブー・マンスール）をマージャーンの上手にあった彼（アブー・アルファトフ）のハーンカーへと連れて行き、彼のもとで彼の聴講録（masmū‘a）のうちの数巻を読んだ（学んだ）。私（サムアーニー）はそれ（聴講録）を彼（アブー・マンスール）から聞いた。その講義には我々とともに地元の人々やよそ者たちからなるイマームの一団が出席した（ḥaḍara ma‘a-nā samā‘-hā jamā‘a min al-a’imma min ahl al-balad wa al-ghurabā’）。」

【引用２】［Muntakhab 2: 1268］
「Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Nāṣir b. Muḥammad b. Abī al-Faḍl b. Ḥafṣ al-Nūqānī。ナウカーンの人々の一人。 ～中略～ 〔法学者として優れた〕彼のもとには地元の人々とよそ者たちからなるファキーフの一団（jamā‘a min al-fuqahā’ al-baladīyīn wa al-ghurabā’）が集まった。」

【引用３】［Muntakhab 3: 1816-1818］
「Abū Bakr Hiba Allāh b. al-Faraj b. al-Faraj al-Hamadhānī al-Ṭafrābādhī。Ibn ukht al-‘Ālim al-Ṭawīl として知られている。ハマダーンの人々の一人。 ～中略～ 彼は Abū al-Faraj ‘Alī b. Muḥammad Ibn ‘Abd al-Ḥamīd al-Bajalī、Abū al-Qāsim Yūsuf b. Muḥammad b. Yūsuf al-Khaṭīb、 ～以下 10 人の名前省略～ といったハマダーンの人々（al-Hamadhānīyīn）に〔ハディースを〕聞いた。またよそ者では（wa min al-ghurabā’）、Abū ‘Abd Allāh al-Ḥasan b. Muḥammad b. Fanjūyah al-Thaqafī al-Dīnawarī の２人の息子、Abū al-Qāsim Sufyān と Abū Bakr Muḥammad、 ～以下９人の名前省略～ 等々に〔ハディースを〕聞いた。」

Ⅱ.『ニーシャープール史』正続編の場合

【引用４】［T.Naysābūr: 66 ; T.Naysābūr(MSS.): f.4a］（預言者イブラーヒームとホラーサーンとの関係を示す逸話の中で登場）
「 ‘Abd Allāh ‘Abbās は〔メッカの〕聖モスクで一人のよそ者（gharībī）に出会った。彼（アブド・アッラーフ）が「どの町の出か言いなさい（bi-gūy az kudām shahrī）。」とおっしゃると、彼（よそ者）は「ホラーサーンの者です（az ahl-i Khurāsān-am）。」と言った。彼（アブド・アッラーフ）が〔再度〕「どの町の出なのか。」と言うと、彼（よそ者）は「ヘラートの出です（az Harāt）。」と言った。彼（アブド・アッラーフ）が「ヘラートの何処の出なのか。」と言うと、彼（よそ者）は「フーシャンジュの出です（az Fūshanj）。」と言った。 ～以下略～」

【引用５】［T.Naysābūr: 204 ; T.Naysābūr(MSS.): ff.60b-61a］（アラブ・ムスリム軍のニーシャープール征服にまつわる逸話の中で登場）
〔‘Abd Allāh ‘Āmir はアラブ・ムスリム軍を率いてニーシャープールへと進軍したが、当時のその地の支配者 Barzān Jāh Ṭāghī Yāghī の抵抗を受けた。戦いは長期戦となり、１ヶ月の包囲戦の後、戦場に雪が降り始めた。〕
「信徒たちの心に心配が広がった。そしてまるで弱者が話すかのように ‘Abd Allāh ‘Āmir の前で次のように言った。「〔今

参考資料

の〕我々はよそ者であり、寒さを伴って降ってきた寒い雪の中にいるアラブです（mā gharīb-īm va az ‘arab-īm dar barf-i sarmā be sarmā furūd āmad）。暑さは〔人を〕傷つけ、寒さは〔人を〕殺す。アッラーフがアジャムを呪い給い、彼らが「寒い！（幸いなるかな！）」と言いながら寒さで死なんことを〔願う〕！」 ～以下略～」

【引用６】［T.Naysābūr: 213 ; T.Naysābūr(MSS.): f.65a］ （ニーシャープールの河川に関する逸話の中で登場）
「Imām Ḥākim は次のようにおっしゃった。「ニーシャープール出身のある者（yakī az Naysābūr）と、〔ニーシャープールから〕遠く離れたある町の出身の者（dīgarī az shahrī dūr）との間に論争が起こった。〔ある町出身の〕よそ者は言った（gharīb guft）。「あなた方の町では旅人に忍耐がなく、沙漠では通行人に水がない。他の地方では例えばユーフラテスやジャイフーン〔のような川〕があるというのに、この町の周囲は全て〔水のない〕荒野なのだ。」 ニーシャープーリーは言った。「これらの言葉は全て無知である。私には自らの知る明らかな真実のもと 100 の論拠がある。 ～以下略～」」

【引用７】［Siyāq(T.N.): 22 ; T.Naysābūr(MSS.): ff.6b-7a］
「al-Ḥasan b. Aḥmad b. Muḥammad Abū Muḥammad al-Samarqandī al-Imām al-Ḥāfiẓ。 ～中略～ 彼はヒジュラ歴 430 年より前に一度ニーシャープールに入り、当時のシャイフたちから〔ハディースを〕聞いた。その後〔いったん〕サマルカンドへ出たが、母親を連れて再びニーシャープールへと戻った。その後は亡くなるまでそこ（ニーシャープール）に居を定めた。 ～中略～ 地元の者、よそ者を問わず多くの人々が彼から〔ハディースを〕聞いた（sami‘a min-hu al-khalq al-kathīr min al-baladīyīn wa al-ghurabā’）。」

【引用８】［Siyāq(T.N.): 255 ; T.Naysābūr(MSS.): f.55b ; Muntakhab T.N.: 546 ; T.Naysābūr(MSS.): f.105a］
「‘Abd al-Salām b. Muḥammad b. al-Hayṣam al-Ustādh al-Imām al-Bāri‘ Abū Muḥammad。 ～中略～ 私は Abū al-Naḍr al-‘Utbī の著書『ヤミーニーの書（*Kitāb al-Yamīnī*）』の中に次のように書かれているのを読んだ。すなわち、彼（アブド・アッサラーム）は 395 年ラビーゥ・アルアッワル月、イマームたちや貴人たちとともに〔アッバース朝〕カリフ al-Qādir bi-Allāh のもとを訪れた。〔その折〕マジュリス（会議）があり、バグダードのシャイフたちやライースたちや貴顕たち、さらにはメッカ巡礼中のよそ者たちのうちの貴人たちやライースたちが集った（kāna al-majlis ghāṣṣan bi-mashāyikh Baghdād wa ru’asā’-hā wa a‘yān-hā wa al-kibār min ghurabā’ al-ḥajīj wa ru’asā’-him）。」

【引用９】［Muntakhab(T.N.): 88 ; T.Naysābūr(MSS.): f.21b］
「Muḥammad b. Abī Bakr b. Abī ‘Aqīl b. Aḥmad al-Ṭarā’ifī al-Ghaznawī Abū al-Fatḥ。優れた人物であり高貴な貴人である。ガズナの優れた人々のうちの、顔役の一人。 ～中略～ ガズナのシャイフたちから、そしてサイード・アルアイヤールやアッラッバーン・アッディーナワリーのような、よそ者の新参者たちから多く〔ハディース〕を聞いた（sami‘a al-kathīr min mashāyikh Ghazna wa al-ṭārīn(?) min al-ghurabā’ mithla Sa‘īd al-‘Ayyār wa al-Labbān al-Dīnawarī）。またバルフ、ブスト、ヘラート、ホラーサーン、イラク、ヒジャーズなどでも〔ハディースを聞いた〕。」

【引用 10】［Muntakhab(T.N.): 129 ; T.Naysābūr(MSS.): f.30b］
「Aḥmad b. Manṣūr b. Khalaf al-Maghribī Abū Bakr al-Bazzāz al-Naysābūrī。 ～中略～ 地元の人々の多くが彼から〔ハディースを〕聞いた。また同様にやって来たよそ者たちもまた〔彼からハディースを聞いた〕（sami‘a min-hu akthar ahl al-balad wa ka-dhālika al-ghurabā’ al-qāṣidūn）。」